

編集後記

『国文学雑誌』八一号を送り出す。

今号は、専任教員の論文四本、卒業研究の成果の論文二本である。卒業して就職し、毎日の仕事に追われながら論文をまとめ、投稿してくれた卒業生の努力に敬意を表したい。

揚妻先生の「言語資料として見た大隈重信の演説「憲政に於ける輿論の勢力」(1)——SPレコードと速記の紹介——」、漆崎先生の「キリシタン版漢字辞書の書名をめぐって——『落葉集』」、その書名に対する疑問——山本先生の「『藤妻冊子』源氏物語和歌注草稿(中)」は前号の源氏物語小特集の続きである。丸山のも七八号の続きである。

揚妻先生の論文は当分続きそうである。また、漆崎先生の論文は、年来の疑問であるとか。山本先生の論文はおそらく次号も続くであろう。丸山も最後の締めくくりの終章を書きたいと思っている。

国語科教育法を担当していたことがある。そこで、学生たちに、これだけは肝に銘じてほしいと伝えたことがある。

〈教師は授業が命〉

学校での一番長い時間は授業だ。授業がおもしろく、好奇心をそそるものでなければ、退屈してしまうのは道理である。授業をおもしろく、好奇心をそそるものにするには、教師はひたすら勉強しなければならぬ、研究しなければならぬ。

研究と教育は、大学にとってもっとも大事な柱である。そこを手

抜きすると、内部崩壊がはじまる。今号は、本学科に研究と教育の両輪が備わっていることを具現しているといえはしないだろうか。

『国文学雑誌』を年一回発行しつづけてきたことは、それがいわゆる業績稼ぎにならなくとも、本学科にとってはささやかな誇りなのである。(丸)

二〇〇九年十一月二十五日 印刷
二〇〇九年十二月三十日 発行

藤女子大学 国文学雑誌(第81号)

定価 五〇〇円 送料八〇円

振替 〇二七〇〇四一六八〇七番

編集人 種田和加子
発行人

札幌市北区北十六条西二丁目

発行所 藤女子大学言語・日本文学科研究室内

藤女子大学日本語・日本文学会

印刷所 札幌市中央区北六条西十五丁目

(株)491アヴァン札幌